

伴大納言画卷中
波丸



石山縁起
画卷中



毛

空山石海

大

大樹や
もし葉が
天国に届きたいなら
根は地獄にしっかりと根を張
るべきだ

雨

雨ちゃんが
俺を困らせるなら
君を娶り

は

昔々

ある少年がいた

生まれたときから翼を持って
いたが

その翼は弱く

人間の持つものとは異なった

しかし彼は空を飛ぶ鳥を見て
自分も空を飛びたいと願った
世界の姿を一度見てみたいと
思った

翼はまだ弱く
少年を飛ばすことはできな
かった
しかし
彼は不屈の精神を持ち
夢を諦めなかった

そこで彼は一計を案じた
遠くの国の首都へと旅をし
一つの砂袋を買ってきた

その砂袋は
西域の大寺院で使われたもの
で
魔王を封じ込める力があると

伝えられていた
砂袋は使用するにつれて大き
く
重くなっていくのだ

彼は
ランニングをしている人々を
見て
よく背中にサンドバッグを背
負っていることに気づきまし
た
しかし、そのサンドバッグは
通常あまり大きくなく
彼らは主に足の力を鍛えるた
めに使用していることになり

ます

そこで彼は考えました
もし彼が自分の翼の力を鍛え
たいのであれば
そんな普通のサンドバッグで
は目標を達成することはでき
ないでしょう
それは軽すぎるからです
そして、彼自身の力が増すに
つれて
サンドバッグの重さが変わら
なければ
強くなることはできません

彼は自分の翼を飛ぶほど強く
するために
魔王の力を封じたサンドバッ
グを背負うことにしました
彼は日夜を問わず
翼を叩き続ける訓練をしまし
た
彼の力が倍増すると
そのサンドバッグの重さも同
様に倍増します
彼は魔王の力を借りて
修行を続けました

彼の翼はますます大きくなり
ある日彼は翼を広げてみると

それは屋根よりも高く
庭よりも広かった
そして彼は試してみることを
決意し
自分が飛べるかどうかを見る
ために

彼は広大な平原にやってきて
ここで試験飛行を行う
彼は翼を羽ばたかせ
全身の力を尽くして飛ぼうと
した
たとえ一ミリでも
しかし彼は飛ぶことができな
かった

彼は何度も何度も試みたが
それでも彼は飛べなかった
そして彼はほぼ絶望してし
まった

その時、
一人の女の子が彼のそばを通
りかかりました
女の子は言いました
「わあ、あなたの翼、ほんま
に綺麗なあ
こんな綺麗な翼、うち、今ま
で見たことあらへんわ
しかも、人間の身体に生えて
るんやね」

そして女の子はまた言いました

「でも、変やんな

飛ぼうとしてるのに、なんで
そんな大きな砂袋を背負って
るん？」

その時、少年は気づきました
実は彼は長年、砂袋を背負って
トレーニングしてきたこと
に

飛ぶ時に本当に必要なこと、
それは自分が砂袋を背負って
いることを忘れていたのです

女の子はいたずらっぽく言いました

「見てみいや

うちが気づかせてあげへんかったら、

いつになったら飛べるようになるんや？

あはは

ほんで、どうやってうちにお礼言うつもりなん？」

少年はこんなに美しくて優しい女の子を見たことがありませんでした

彼は顔を真っ赤にして、
恥ずかしがって全く口がきけ
ませんでした

女の子はまた言いました
「ほな、約束してな
試しに飛ぶ時、うちを抱いて
飛んでみて
どうや？」
「空からこの世界を見る感
触、私も知りたいの」
少年は答えました
「それは難しくないけど
でも、これが私の初めての試
飛なんです

十分な自信ありませんし
それはかなり危険かもしれないです
本当にいいのですか？」

すると女の子は笑顔で言いました
「お前が飛ぶんなら、うちも
ついていくで！」

そして女の子の助けを借りて
少年は砂袋を取り外しました
そして女の子を抱いて
最初はゆっくりと
徐々に加速して

彼は自分の翼を羽ばたかせました

驚いたことに、あっという間に

彼らは雲の中へと飛んでいきました

雲の中にはなんと宮殿があり、

そこにはさまざまな美しい花が咲いていました

こんな光景、二人とも経験したことはありませんでした

二人は白いゴムの花を見つめながら

その香りをかぎました
この香りは地上では感じたこ
とがないほど、
とても淡くて魅力的でした
そして二人は地面に座って一
緒に泣きました

進んで行く
宮殿の中
香積佛が法を説いている
各路の菩薩、阿羅漢が両側に
立っている
ただ香積佛が花を指さす
白樺の花びらがまるで大雨の
ように

空から降り注ぎ
雲中の地面に落ちる
地面は花びらで海のように
なり
雲と花が区別できない

その時
場にいる者たちは薄い香りだ
けを感じる
ただ一輪の白樺の花との香り
に違いはない

文殊菩薩が仏に問う
こんなに多くの花があるのに
香りはなぜ濃くならないので

すか？

ただ香積如来が獅子座の宝座
に座っている

無上の荘嚴、無比の威光を有
して

全身から金色の光を放ち

花海を照らす

雲が一瞬にして金色の海に変
わる

陸地に住む人々が見上げると
金色の空しか見えず

太陽の位置を見つけられない
神州の大地に金色の霧が立ち
込め

その霧が及ぶ所では
花が一斉に咲き誇る
しおれた葉が再び緑を取り戻
し
すべての植物が金色の霧でざ
わめき
リズムを形成する
三十二種の旋律が生まれる
一時
世界のすべての楽器が
自然の驚異的な交響曲を聴く
ため
静寂を保つ
すべての人間、動物、すべての
の生命が

一緒に礼拝する
この壮大な光景をたたえる

香積佛のそばには、神獣が伏
しています

その法名は香昂
香昂は全身が雪のように白い
毛で覆われており
近くで見るとその毛の一本一
本から銀白色の光が放たれて
います

それは微かに見え隠れし、あ
る時は存在し、ある時は無い
かのようです

彼は無限の清浄を備え

最上の莊嚴を持ち
無量の智慧を有しています
彼の光を見た菩薩や阿羅漢は
即座に清浄な眼を修得し
あらゆるものを観察し
魔障を破り真実の姿を見ることができるとされます
それが清浄眼と呼ばれています

香積佛は答えます
「これらの花は皆
清浄で染みのない花です
花卉から花芯まで
一切の貪欲を持ちません

そのため
彼らは自身の香りを抑え
他の花にその香りを譲っています」

この時
大自在菩薩が一步前に出て
手を合わせ
仏に問います
「それならば
なぜここでただ一輪の花のよ
うな
淡い香りが感じられるのです
か？」

その時
花海の中央で一輪の花が軽く
揺れましたが
他の花は完全に静止していま
す
皆が視線を向けると
そこには大きな赤い刺桐の花
がありました
それを確かめるために
皆が交互に近づき
香りを嗅いでいきました
それが香りを発しているのは
この花であることを確認した
後
彼女は空中に浮かび上がり

誰もが見ることができるよう
にしました

そして

彼女は次第に増え続ける花の
香りを放出し始めました

すぐに

ひゃくにじゅう人の天女たち
がこの香りを嗅ぎ

魅力的な微笑みを浮かべまし
た

場にいたごせん人以上の阿羅
漢たちは

この香りを嗅ぐと即座に
永遠に後戻りしない菩提心を
成就しました

この時
香積佛は皆に語りかけます
「実は
すべての花が花の香りを断ち
ただ一輪の花だけが香りを
放っています
彼女は花の香りを断っただけ
でなく
戒律そのものを断ったのです
そのため
彼女の香りは無欲であり
大きくも小さくも
濃厚でも薄くも
完全に自然のままです

この香りは香りであり
無香であり
般若であり
禅定であり
大きな清浄であり
大いなる自在であり
最上の正等正覚であるので
す」

大殿の遠くに座っている少年
と少女は
仏の教えを聞いています
その時
少年が少女に尋ねます
「私たちはまだ世界を空中か

ら見ていませんが
今見に行くべきですか？」

しかし、少女は少年の手を引き
言います
「ここは本当に美しいですね
私たちは今後ここで生活する
ことにしましょう
過去の夢を忘れ
二度と世界を見ることはしま
せん
どうですか？」

少年は黙っています

二人は地面に座って泣きました

それ以降

彼らが地面に座れば雨が降り
寒いと感じると太陽が現れる
ようになりました

二人は二度と世界を見ようと
せず

翼や砂袋のことも忘れてしま
いました

彼らはその後

仙人のような生活を送りました

虹

雨ちゃんが
もう困らせないで
娶りました

が

ブラックホールが見えないの
は
君がその中にいるから

ホワイトホールが見えないの
は
それがブラックホールの外に
あるから

出

真実を見ることができない
なぜなら
見た瞬間に
それが変わるから

真実を聞くことができない
なぜなら
聞いた瞬間に
それが変わるから

真実を考えることができない
なぜなら

考えた瞬間に
それが変わるから

る

あなた
目で事実を見ようとするのは
間違っています
それは違うのよ、
なぜなら、見ているものは、
ただ、
見た後の事実

あなた
頭で事実を判断ようとするの
は間違っています
それは違うのよ、

なぜなら、
判断したものは、
ただ、
判断する前の事実

至

働きまくって、働きたくなく
なるまで
休みまくって、休みたくなく
なるまで

食べへんようになるまで食べるで
食べるまで食べへんで

死ぬまで生きまくるで

降

数年前、
君の人生を逃した
しかし今、
君は知っておくべき
僕は存在しない形であなたの
人生に関わっていました

り

もし、すべての物事に対して無関心でいられる方法があるとしたら、その方法は「無関心」自体に対しても無関心である必要があります。つまり、「無関心を許す」無関心、これを「大無関心の法」または「大忍」と呼びます。

それに対して、どんな状況でも「動心」を許さない方法は「小無関心の法」または「小

忍」と呼ばれます。

一つの事物を例にとると、第一段階では、その対象に対して動心しかできません。第二段階では、その対象に対して無関心でいられるようになります。第三段階では、その対象に対して無関心でいられるだけでなく、「無関心」自体にも無関心でいられるようになります。

ここまで来れば、一つの事物に対して大無関心が完成しま

した。そして、この方法を世の中のすべての事物に広げることで、業障を断ち切り、我慢できない事物はなくなります。これを「大無関心の法」または「大忍」と呼ぶことができます。

もし誰かに「空無」をどう表現するか尋ねた場合、彼は「何もない」と答えるかもしれません。あるいは、白い紙を見せて「これが空無だ」と言うかもしれません。しかし、彼は間違っています。なぜな

ら、「何もない」という状態があるとすれば、その状態自体が存在してしまい、真に「何もない」わけではありません。また、白い紙も白色が存在するため、真に色がないわけではありません。

これは、画家に「透明」をどう描くか尋ねるのと似ています。画家は困ってしまうでしょう。なぜなら、透明は描くことも描かないこともできないからです。透明は完全な空無であり、色がないだけで

なく、「色が無い」（白色）という概念すら存在しません。

清水の色は何ですか？恐らくこう答えるしかありません：あなたが見た色がそれです。この性質を「透明」と呼びます。したがって、仏の性質もまた透明であるといえます。仏の存在を証明したいなら、まずは「透明の存在を証明する」ことから始めてみましょう。

第一の方法：純白の浴槽に清

水を満たし、その後一滴の墨を落とすと、水の白色が徐々に黒色に変わるのが見えます。この時、水そのものが透明であることがわかります。

第二の方法：白い壁の前で、黒い布で目を覆い、その後その布を突然取り除くと、白い壁が見えます。この時、空気が透明であることがわかります。

「無から有を生じる」「有から

無を生じる」というのは、透明の存在を証明する二つの方法です。

この話題についてさらに質問をすると、「完全に何もしていない状態」をどのように表現するかという問題です。

もし誰かに「何をしているの？」と尋ね、「何もしていない」と答えた場合、実際には「何もしていない」という行為をしているわけです。このため、「完全に何もしてい

ない状態」は通常の方法では表現できません。なぜなら、たとえ何もしていなくても、「何もしていない」という状態を維持していること自体が行為だからです。

私たちは、物事が見えること、音が聞こえることを「世界」そのものと考え、「自分」がその「世界」の中に生きていると考えます。したがって、無音を聞くと「何も聞こえない」と無意識に考えてしまいますが、これは完全に逆

転しています。なぜ逆転しているかということ、見えることや聞こえることのすべて（いわゆる「世界」）を「自分」以前の存在と考えているからです。

だけど唯物主義では、「世界」や「宇宙」の定義は、観察者よりも先に存在し、「観察者自身」を含むすべてです。これが唯物主義の核心思想です：唯物主義では、世界の存在が観察者と無関係であると仮定しています。（実際には

関係していますが)

「宇宙」が観測前に存在すると仮定するのが唯物主義の本質であり、理論の重大な欠陥です。この欠陥により、唯物主義は基本物理法則を本質的に説明できず、単に「公理」として設定するしかありません。たとえば、光速がなぜ一定であるかを説明することができません。観測の参照系が何であれ。しかし、唯物主義を超えれば、これは非常に簡単です：なぜなら、この世界

はもともと「測定によって得られたもの」であり、測定範囲内に存在するものしかありません。

唯心主義は、私たちが世界よりも先に存在すると考え、「我思故我在」と主張します。もしそうなら、世界が存在する前に「私」の存在を定義するのは誰でしょう？それは自分自身しかありません。では、自分自身の限界をどう定義できるのでしょうか？外界がないとすると、限界は大きくも

小さくもなり得ます。「私」は存在しなくなるでしょう。なぜなら、自分の限界を定義できないからです。

結局、「見るか見ないか」と「存在するかしないか」を結びつけることは、唯物主義や唯心主義の設定に限られます。唯物主義の自然科学体系では、万物が観察者よりも先に存在し、「存在するかしないか」が先にあり、「見るか見ないか」が後にあります。もし「存在しない」なら、自然には「見

ること」が不可能です。唯物主義は、世界が私たちよりも先に存在すると考えます。月の例でこれを批判しましょう。もし誰かが月が存在すると主張し、事前に月の存在を観察していなかった場合、それは可能でしょうか？もしこれが成り立つなら、誰もが「月」を言うことができ、これは「観察者のいない」宇宙に存在することになります。

「A」がある場合

「未-A」が表示されます

そして、「A」を観察している
「B」がなければなりません

「未-B」表示されます

そして、「B」を観察している
「C」を表示されます

「C」は「A」である場合
次いで「A」および「B」は
互いに観察しています

「B」は「未-A」に属している
必要があります

「A」は「未-B」に属している
必要があります

要約すれば

「A」がない場合、

そして、何の「未 -A」はありません

そして、何の「B」はありません

そして、何の「未 -B」はありません

だから、打ち上げ：

「A」が存在する場合は、「B」があります

「A」が存在しない場合、「B」はありません

だから、唯物主義の枠を超えると、存在は絶対的ではなく、特定の観察者に対して相対的なものとなります。たとえば、「私はテーブルを見ている」と言った場合、このテーブルは「私」に対して「存在する」ものであり、他の観察者に対して「存在する」と保証するものではありません。本質的には、テーブルを見ているとき、テーブルがあなたの観察前に存在すると考えるのは不正確です。「存在する」という概念を使うとすれば、

「私がテーブルを見ている」
と言うしかありません。

「存在」が相対的になると、
「すべての物事が存在しない」という可能性が生じます。私たちは一つの世界を見ていますが、この世界は観察者に対してのみ存在します。したがって、本質的には、私たちも世界も存在しないことがあります。

「すべての物事が存在しない」というのは文字通り理解

すると誤りです。観察によって得られた「存在」を「色」と呼ぶなら、本当の完全な空無を「空」と呼ぶことになります。観察されたものはすべて真空から生じているのです。一方で、「空」は感知することができません。なぜなら、「色」を観察しない限り、「空」を感知することはできないからです。これが「色即是空、空即是色」の解釈です。

「色」と「透明」を使ってこの文を解釈してみましょう。

「色」を「色」と呼び、「透明」を「空」と呼ぶと、理解しやすくなるかもしれません。まず質問です：透明をどのように感知するのでしょうか？透明を直接見ることは不可能であり、見えるものは必ず色がついています。これが「空即是色」です。逆に言えば、見える色はどれも透明から生じているのです。これが「色即是空」です。

電子の二重スリット実験では、電子が私たちの観察行為

を感知しているように見えます。「人が観察する」場合と「人が観察しない」場合で干渉縞が異なることが観察されます。これは唯物主義の自然科学では理解できません。唯物主義は「電子」が元々存在していると仮定していますが、この仮定自体が誤りです。観察がなければ「電子が発射された」と知ることは不可能だからです。観察が必要であるからこそ「電子」は「存在」し、それが「人が観察する」場合と「人が観察しない」場

合で干渉縞が異なる理由を自然に説明します。これをこう理解できます：「人が観察しない」場合の干渉縞は「紙板の観察」の結果であり、「人が観察する」場合の干渉縞は「人の観察」と「紙板の観察」の重ね合わせの結果です。もし「誰も観察しない」場合に「電子」が存在する理由をどう考えるべきかということ、唯物主義的世界観では量子物理学の「不確定性」を提起しますが、実際には「量子」は「観察後」に初めて「存在」し、

「観察前」の状態は本質的に「波」であり、天然の「不確定性」を持っています。しかし、唯物主義では「波」を実在する「存在」として扱い、また「波粒二重性」を認識しています。これが唯物主義における「観察後」の「不確定性」を人工的に設定していることを意味します。

観察者と世界は互いに存在を証明し合います。もしお互いに分離すると、どちらも存在しません。これは、観察者と

世界の本源が同じであり、真空から生じているからです。この真空は全くの空無であり、絶対に何も存在しません。この空無を悟ることが世界の真実を見ることになります。全くの空無、絶対に何もない状態では「空無」自体も存在しません。したがって、全くの空無は表現することができません。表現があれば、それは全くの空無ではないからです。ですので、これは証悟するものであって証明することはできません。

白色が透明でないように、白色も自分が透明であることを忘れることがあります。それは透明の中で生じます。透明をどのように見つけるかは、どんな方法でも見ることはできません。なぜなら、見ることができるものはすべて色がついているからです。しかし、どんな方法でも透明を見ることができるのです。なぜなら、見える色と目の間には必ず透明が存在するからです。もしそうでなければ、見

ている色は別の色になるでしょう。目と別の色の物体の間にも必ず透明があります。もしそうでないなら、同様のプロセスを繰り返して、透明が証明されるまで続ける必要があります。

や

非真

非非真

真や

非善

非非善

善や

非美

非非美

美や

朝

朝、香香を散歩させた
彼女とたくさん遊んで、とても遠くまで歩いた
「今、どうやって家に帰るの？道案内して」と彼女に尋ねた
すると、香香はじっと立って動かない
どれだけ動いても、彼女は全く動かなかった
それで、私は香香を抱っこして、一緒に歩きながら彼女に

言った

「君は本当にすごいね

家に帰る道を見つけたんだね

お父さんに抱っこさせる方法

を考えれば

お父さんが歩く道は必ず私た

ちの家に向かっているってわ

かっているんだね」

お昼に香香を連れて市場に買

い物に行った

帰り道は手にたくさんの野菜

を提げていた

すると、香香は道案内をしな

がら、一度も抱っこをねだる

ことなく歩いていた
「お父さん、お疲れ様
私が家に帰る道を知っている
から
お父さんは道を気にしないで
いいよ」
と言わんばかりに

夢

暗い暗が明である
明い明が暗でない
だから
光の本質は
暗いである

空の空が実である
実の実が空でない
だから
物質の本質は
空の中にある

を

稀なる君を
とりこになる君を
かばう君を
大切にする君を
求める君を
慕う君を
見つめる君を
愛おしむ君を
想う君を
追い求める君を
敬う君を
供える君を

運

すべてには価値があります
なぜなら、
そうでないと、
「価値なし」というものがそ
の価値になってしまいます

ん

陽はまるいんや
なんでかって言うとお前の瞳
孔がまるいからやねん

で

「生きている私たち」は生き
「死んだ私たち」は死ぬ
つまり
私たちは生きていないのです

「生きている私たち」は死ぬ
「死んだ私たち」は生き
つまり
私たちは死ぬていないのです

く

詩人はいつも仮面をかぶっている

なぜなら

彼が仮面をかぶっていないとき

実際には「仮面をかぶっていない」という名前の仮面をかぶっているから

み

僕たちは
必ず沈む運命の船を操っている
誰がより速く遠くまで進める
か競い合っている
船が沈んだ後
もし君がまだ生きているなら
兄弟、
陸に上がることを忘れない
で！

た

あげたもんが多くても
あいつはまだ欲しがる

あげたもんが少なくても
あいつは満足してる

いい

「ある」は「ない」の「ない」
だけど、
「ない」は「ある」の「ある」
でない

わ

お前はお前や

白くてデブな鬼わ

わいはわいの旦那やな

う

人生は長い
君を待ってええ

人生は短い
相手する時間あらへん

うちは悪い
愛さんといってください

うちはおとなしい
永遠に大切にしていな

ち

ほんまに地獄の水って
天国の花に使えるんやな
ほな
花の種を人間界に撒いたら
人間界も楽園になるんちゃう
せやな

も

君が私に尋ねるとき

「私はどこですか？」

君が尋ねたいのは：

君が私に尋ねている間

私はどこにいますか？

または：

私が君に答えている間

私はどこにいますか？

君が私に尋ねている間

私は忘れて

私が君に答えている間

君は関係ない

でも

君がこれらの答えを見ている
間、

私はどこにいるのですか？

親愛なる！

おそらく私は死んでしまった
かもしれませんが

それでもここにいますよ
もし違うならば

君に答えているそのは
一体誰なののでしょうか？

君

君は
俺の永遠の痛み
一緒にいるときは激しい痛み
別れた後もぼんやりとした痛み

君は俺の永遠の災い
冷静な時には抱きしめ合えない
制御を失った後
全てを散らかす

君と俺
華麗なる
雪崩

の

世界中の愛を集めて
そっと置いておくわ
あなたの訪れを待っているの

大地は広すぎて
あなたが見つからないかもし
れないから
愛を小道に敷き詰めておくわ
あなたが通り過ぎることを
願って

夜は暗すぎて

あなたが見えないかもしれな
いから
愛をろうそくにして
小道の両側に灯しておくわ

ろうそくが燃え尽きたら
あなたはまだ来ないのかしら
だから愛を風船にして
高く、とても高く飛ばすの
空の果てまで

もしまだ見つけられないのなら
地球に撒いて
黑夜に撒いて

世界中に愛を広めるわ

そ

自律を捨てたから
放縦した
放下を捨てたから
執着した

貪欲を倍加させ
さらに倍加させる
そのまま
殺意に溺れるまで

殺意を殺したから
もう殺さない

ば

覚えておいて、
何をしようとも
死を免れることはできません
だけど
忘れてはいけません
そうでないなら
生きているものは何ですか？

に

何故外に求める
空の中には自ずと無限がある
あなたがいる
私もいる

何故内に観る
心の中には一つも物がない
他もない
ないもない

か

火は熱の証拠から
憎しみは愛の証拠から
疲れを知らぬこと
熱愛の証拠ですか

ら

空へと向かい続けて
空が空へとなるまで
さらに進め
空の空が無限大へとなるまで

愛

家族や子どもより大事なことは
ないわ
人は無理して有名になる必要
なんかないわ
ぼくはむしろ田舎で羊や馬の
世話をして
大切な人と一緒にこの一生を
過ごす方がええと思うわ
しかしたまには
好きな人も他の人と遊ぶのが
好きかもしれんねん笑

おまえが海にギター弾きに行
きたいねんけど
彼女は人いっぱいの場所で
パーティーに行きたがってる
感じやな
あんたが放牧みたいな生活し
たい言うてるのに
恋人は田舎にはなんもない言
うてるねん
好きなんは都会の華やかな生
活や～

それでな、
情熱っちゅうのは生活の全部
やねん、

生活の形には関係あらへんけど

もし都会で楽しめるんなら
田舎でも楽しめなあかん
そうやない人は追求しとるだけで

本当の品味がないんやわ
昔、中国の言葉に「無求品自高」でした

意味は、
自分の追求をやめれば
自然と品が高くなるねん～

だから最後の「放牧な生活」
みたいな考え方もアカンねん

やっぱりさ、
もう一つの意識や
意識がある限り、必ず衝突す
るわ
寺院生活を受け入れられるん
やったら
最も繁華な地域に住むことに
何が悪いんやろか？

みんな完全に忘れてしもうた
もう何も意識せんといて
これが芸術の機能やねん
ただ自己表現だけやったら
聴衆との真のつながりができ
んかもしれんでも逆に

気に入られようとして
自分の表現したいことを欠い
たら
それも逆効果や
ええ芸術はいつもその中間や
な

し

意味のあることをやっている
と思うなら
すべてが無意味であることを
知るべきです
でも、これから
することは何でも意味がある

て

生命を大切にしないと
後悔するでしょう
なぜなら
日々は限られていますから

生命を大切にしても
同様に後悔するでしょう
なぜなら
生命を大切にしない日々も同
様に限られているからです

いる

安全を抱いていると
背後には危険が待っている

危険を抱いていると
背後には安全が待っている

つ

現在は
一片の空白
過去にいるか
未来にいるかどうか